

3-1 辻地域の景観 1

①辻地域の概要

1 自治区の成立 (※1~2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした)

江戸期	岡藩領小宛組に所属。辻村・年野村から成る。
明治 8 年(1875)	辻村・年野村が合併し辻村となる。
明治 22 年(1889)	町村制実施により、小富士村大字辻となる。
昭和 30 年(1955)	町村合併により、緒方町大字辻となる。
平成 17 年(2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町辻となる。

2 主な出来事

永正 4 年(1507)	辻のヤグラ(僧侶の生前墓)が造営される。
16 世紀	辻河原石風呂が造営される。
寛文年間 (年不詳)	普濟寺井手建設〔平瀬井手の原型、現在の平瀬(牧原・辻)井路〕 長淵井路の原型完成(文化年間以前と言われる)。
天保 11 年(1840)	長淵井路堰堤流失。
寛文 2 年(1662)	緒方上井路開鑿。
弘化 2 年(1845)	緒方井路改修記念碑建立(石割碑)。
文久 3 年(1863)	平瀬井手竣工〔普濟寺井手の取り入れを牧原の平瀬から行う。現在の平瀬(牧原・辻)井路〕。
慶応 4 年(1868)	新堰碑〔平瀬(牧原・辻)井路〕建立。
明治 27 年(1894)	長淵井路延長工事・隧道工事で、牧原・辻へ通水。
大正 12 年(1923)	長瀬橋架設。
昭和 48 年(1973)	新長瀬橋架設(県道緒方高千穂線)。
昭和 54 年(1979)	県営圃場整備完了。
平成 2 年(1990)	7月2日、記録的な豪雨災害発生。
平成 5 年(1993)	9月3日、大型台風13号の直撃により、辻河原公民館流失。
平成 6 年(1994)	年野公民館改築。
平成 9 年(1997)	前辻公民館竣工。

3 辻地域の構成・人口など

組合名	前辻、裏年野、倉園
戸数・人口	46戸、102人(令和元年12月)

②辻地域を潤す井路と景観

辻地域は蛇行する緒方川の左岸にあり、前辻、裏年野、倉園の3組合から成る(写真9)。景観選定範囲内の組合は、前辻・倉園であるが、特徴的な前辻集落について



写真9 辻地域の位置図

て述べる。前辻組合は緒方川を見下ろす第1段丘上に最も人家が集中し、その他に県道沿いの第2段丘面、長瀬と呼ばれる第3段丘面上に人家がある。前辻組合も、牧原・上年野組合と同様に、耕作地を活かすため山際に集落が形成されている。

辻組合を潤す井路は、富士緒井路・長淵井路、平瀬（牧原・辻）井路の3本である（図16）。富士緒井路は、第1段丘よりも上部にある窪地を潤す。長淵井路は第1段丘面・第2段丘面、平瀬（牧原・辻）井路は第3段丘面を主に潤している。なお、富士緒井路の末流は長淵井路に流入し、長淵井路の排水は平瀬（牧原・辻）井路に流入し水田の灌漑に利用されている。それぞれの井路で完結せずに、他の井路に流入させており、水を無駄に捨てていない。より多くの水を確保する仕組みになっている。

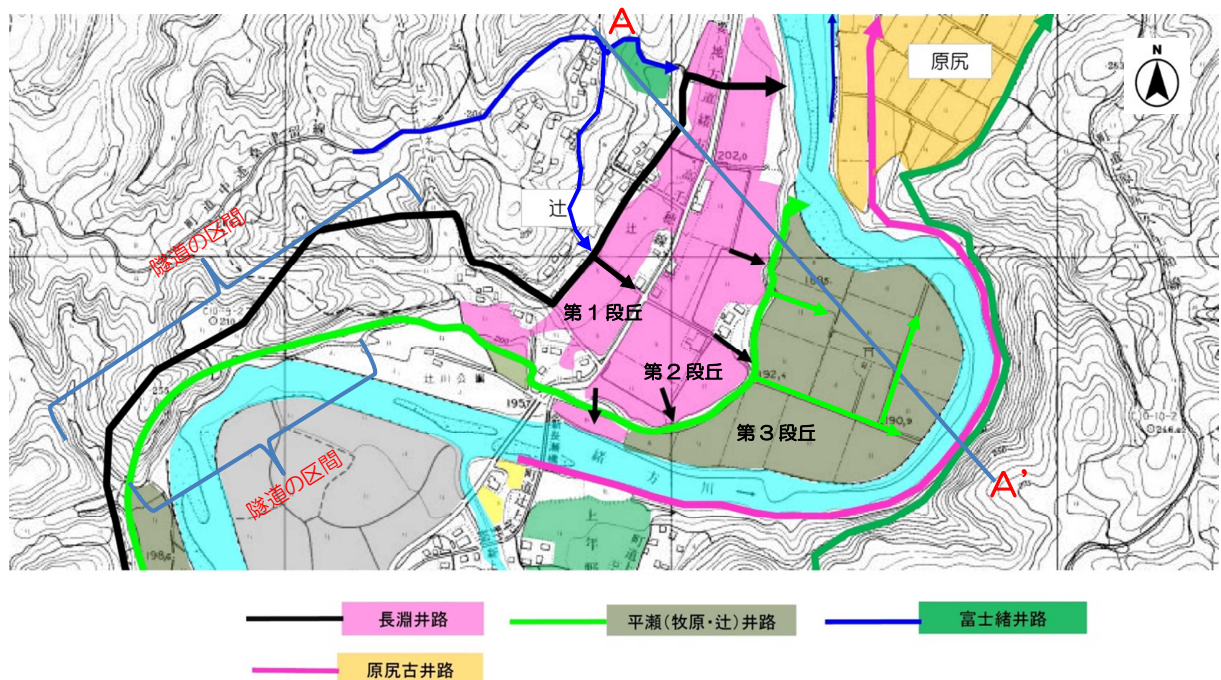


図16 辻地域の井路と圃場

③辻地域の圃場の現況

写真10、11は昭和51年（左）と平成28年（右）の空中写真である。辻地域では昭和54年に県営圃場整備が完了し、旧来の棚田形状は全く残っていない。



写真10 昭和51年の空中写真



写真11 平成28年の空中写真

④旧字図から見た辻地域の圃場の現況

写真 12 は、辻河原の圃場を北側から空撮したものである。第 1～3 の段丘が見える。図 17 は、辻地域の圃場の旧字図で、明治 21 年調製のものである。現在、長淵井路により灌漑される第 1・第 2 段丘面の地目は、明治 21 年当時は「畑」（黄色着色）であった。明治 27 年以降の長淵井路通水後、地目が「田」に書き替えられている。平瀬（牧原・辻）井路により灌漑される第 3 段丘は、明治 21 年当時は、既に「田」である。

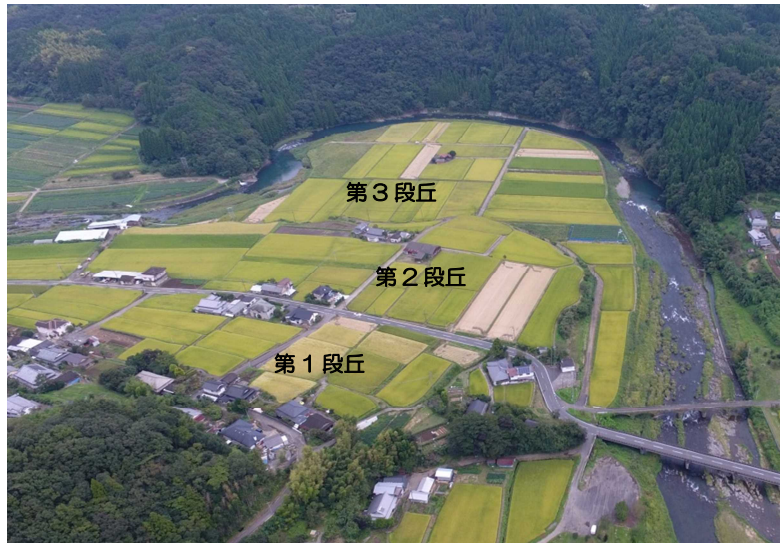


写真 12 辻地域の空中写真

現在、辻組合の最上部から第 1～第 3 段丘面の圃場が見渡せ、見事な水田景観が広がっている。これらは一気に水田化したのではなく、牧原や上年野でも見られるように、「まず段丘の最下部から水田

化し、年代を重ねて長距離井路を開発する技術（長距離隧道工事など）が近代になり進歩したことにより、段丘上部までが水田化していく」という形態である。

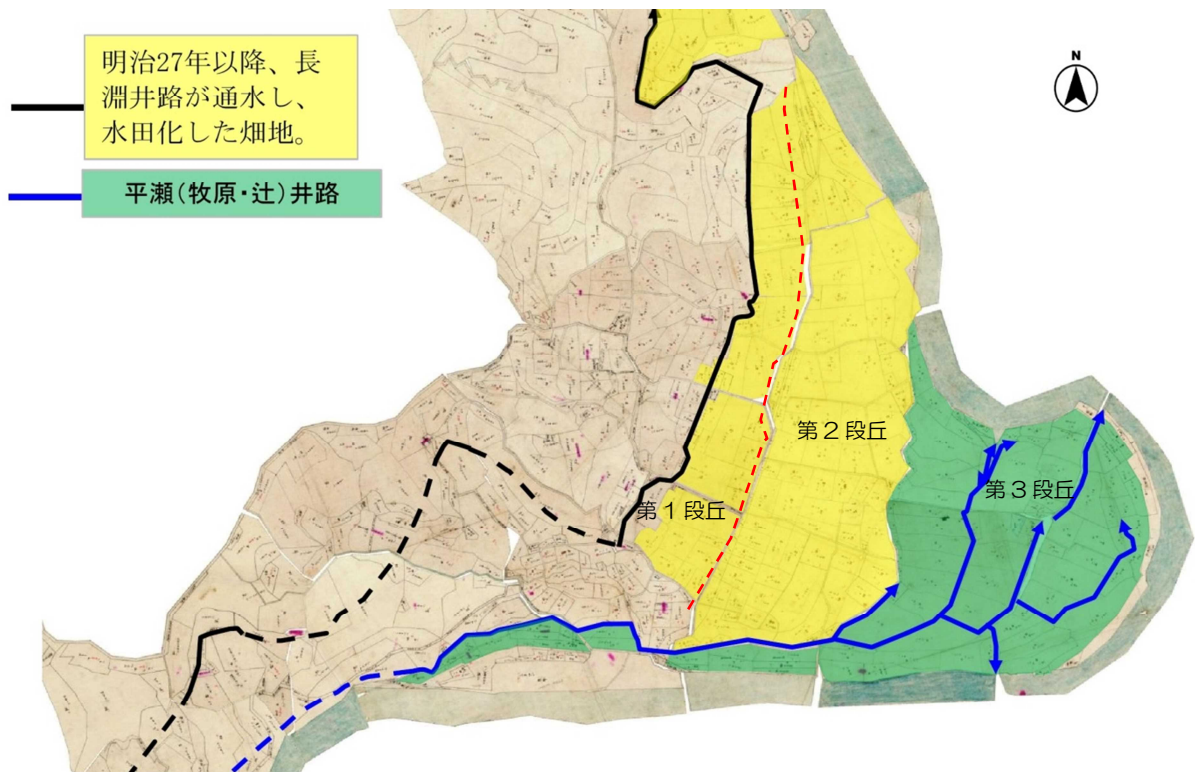


図 17 辻地域の旧字図（明治 21 年当時の田畑の区分）

図 18 は、辻地域の断面模式図である（図 16 A-A' 間）。江戸期に最も低い第 3 段丘が水田化し、近代になり長淵井路が牧原・辻まで延長され長い隧道が掘られ、第 1・第 2 段丘が水田化した。そして大正 3 年に丘陵部を潤す富士緒井路が末流まで開通し、棚田が形成されていった。なお、それぞれの段丘面は緩やかに傾斜しているが、模式図では傾斜は表していない。

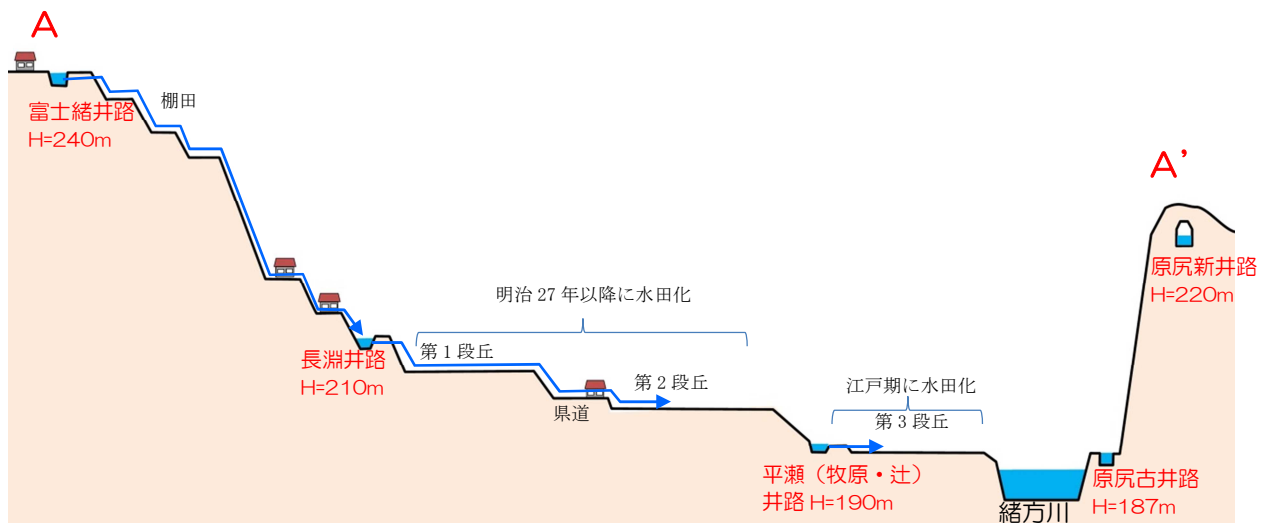


図 18 辻地域の断面模式図（図 16 A-A' 間）

⑤ 辻地域の景観を形作る構成要素



現在、高所から緒方川方向を見下ろすと、一面水田である。しかしながら、一つの時代・一つの井路で水田景観ができあがった訳ではない。長淵井路・平瀬（牧原・辻）井路は、凝灰岩の岩盤を掘り貫き、長距離の水路を構築するなど、明治以降の土木工事技術の向上が水田の拡大に寄与した。辻地域の水田景観の特徴は、三つの段丘が江戸期から大正期にかけて、時代を経て水田化していったということである。

辻地域は、江戸期から近代にかけて形成された水田景観であるが、その他に辻河原石風呂や辻ヤグラ、高岩石幢など中世の遺構が集落内に残されている。辻河原石風呂は、大分県指定有形民俗文化財であり、現在でも地元住民により利用されている唯一の石風呂である。保存会が組織され、小学生や市民の体験入浴会が開催されている。辻ヤグラは、岩窟内を方形に掘り込み、内部に宝篋印塔が立てられている。鎌倉地方で発達した文化が、豊後国内陸部に相当な年代差を経て造営されている。中世の雰囲気が色濃く残されている場所である。

表 3 辻地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	辻河原石風呂		県指定有形民俗文化財。豊後大野市に 11 基あるうちの一つで、現在も使用されているのはここだけ。地元で保存会が結成され、小学生や市民の入浴体験を行っている。安置された宝塔から 16 世紀の造立と推定される。

番号	要素名	写真	説明
2	辻ヤグラ		僧侶の墓で永正4年の銘がある。逆修の塔で、本場鎌倉のヤグラと比べても遜色がない。最盛期よりも300年を経ているのでヤグラと呼んでよいか疑問もあるが、中世の墓制を残す貴重な物である。
3	新堰碑		文久年間に旧堰が壊れたため、新堰を建築し井路開鑿のため岩を穿つこと150丈(約450m)と記されている。井路開鑿の困難と開鑿後の喜びが記されている。石碑の建立は慶応4年(1868)である。
4	長瀬橋碑		大正12年に建設された長瀬橋の記念碑。大正11年に豊肥線緒方駅が開業したため、交通の便を良くし、地元経済の発展を願ったことが記されている。
5	高岩石幢		永正4年(1507)の銘がある、願主は渡邊膳衛門で、六地藏による救済を願い建立したものの。
6	辻天満社		広い圃場の中にある唯一の建造物。寛文13年(1673)、岡藩主中川久清創設の神社と言われる。藩主が狩猟の際に石祠を拝んだところ、たちまち神応があり鴨三羽を捕獲したため、社地一反を寄付し天満社として創建したという。

番号	要素名	写真	説明
7	辻の圃場		緒方川左岸の3段の段丘が、江戸期から近代にかけて水田化した。低地から水田化し、時代が下がると段丘上まで水田化していく様子がよくわかる場所。圃場整備が完了しているが、美しい風景が広がる。
8	長淵井路と隧道		辻の圃場を潤す長淵井路の隧道。縞模様を描く地層は、阿蘇火山降下火砕物（阿蘇3-4間）で、約12万年前から9万年前の間に降り積もったもの。辻の第1段丘・第2段丘面の水田を潤す。
9	平瀬（牧原・辻）井路と隧道		辻の圃場を潤す平瀬（牧原・辻）井路の隧道。阿蘇火山の凝灰岩（阿蘇3）を穿っている。辻の第3段丘面の水田を潤す。

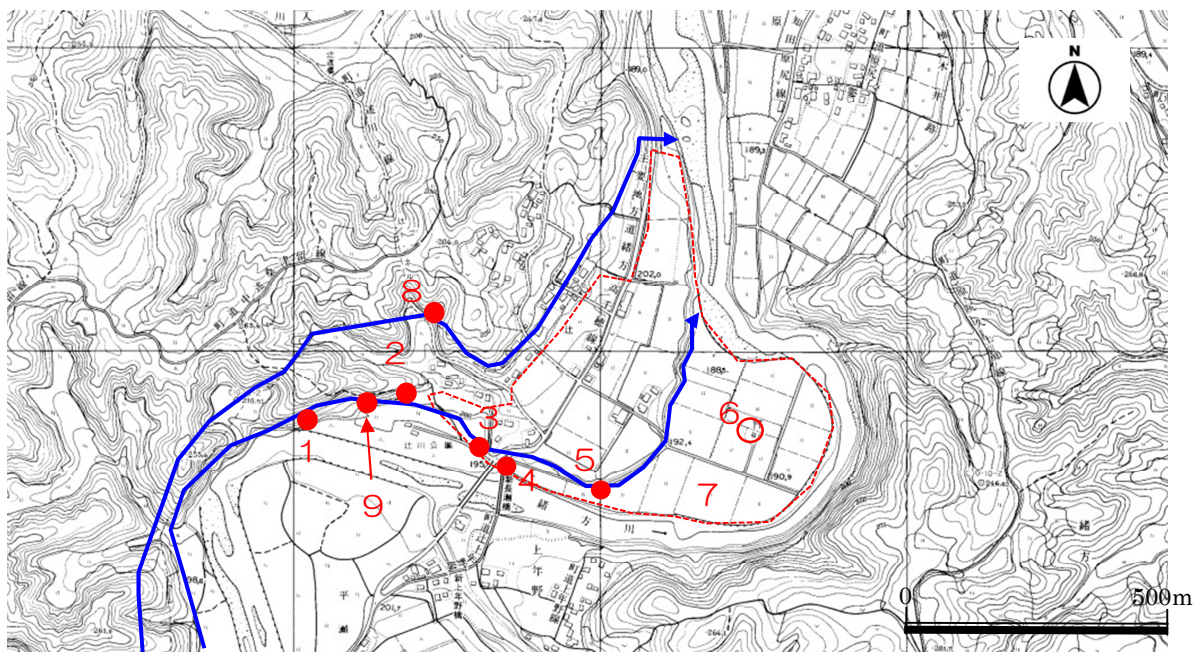


図 19 辻地域の構成要素の位置図

3-2 辻地域の景観2（緒方上井路に関わる景観）

①緒方上井路取水口

緒方上井路は、緒方町辻字蜘蛛迫から取水し、原尻（倉園）・上自在・下自在・馬場・井上・野尻へと流れる幹線延長9.5kmの灌漑用水路である。緒方上・下井路が潤す緒方盆地左岸の圃場のうち、上井路が灌漑する面積割合は約46%を占める（令和2年現況調査による）。緒方川河床の溶結凝灰岩は、幾筋もの溝状に侵食されており、緒方上井路は左岸側に堰堤を築いて下流域まで導水している（写真13 赤矢印部分）。

対岸の緒方川右岸には、三区井路（野仲井路）が取水口を設けている（写真13 黄矢印部分）。三区井路取水口は、緒方上井路取水口から上流へ約125mの地点で、緒方川右岸・左岸の圃場を潤す井路が、ほぼ同一の標高から河川の水を灌漑用水として利用している。

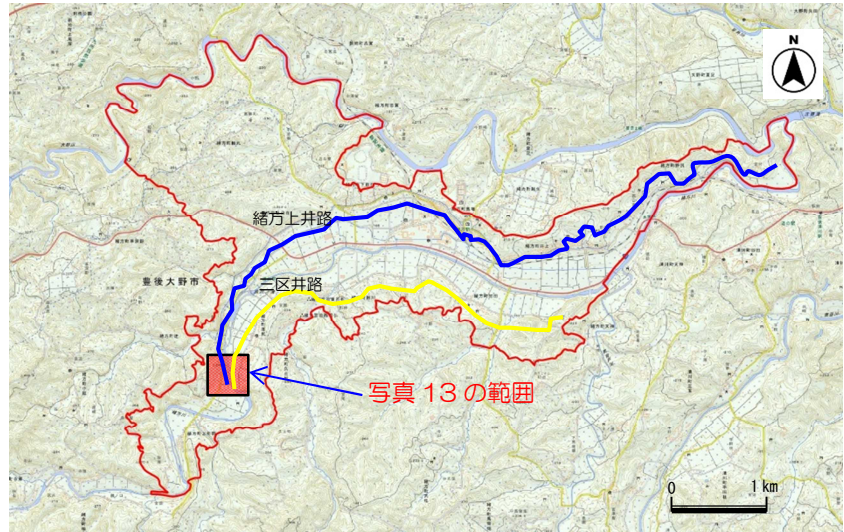


図20 緒方盆地（景観選定予定範囲）
〔地理院地形図1/25000〕

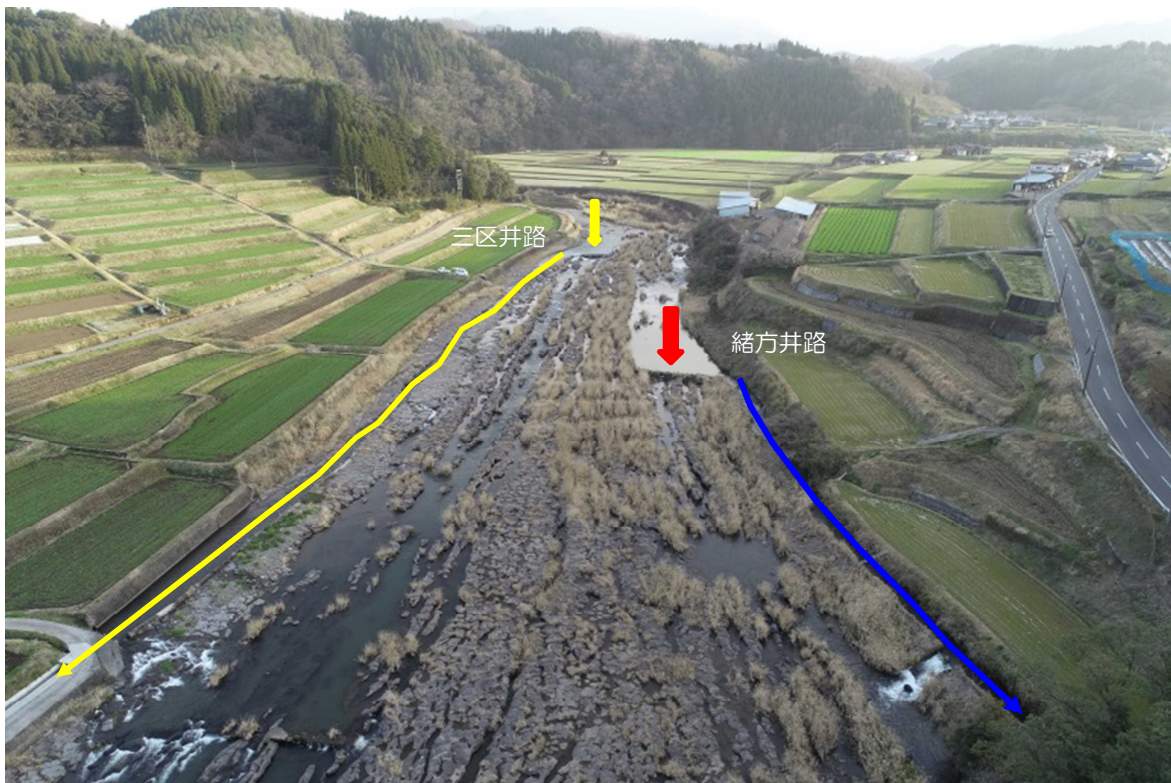


写真13 緒方上井路（右）と三区（野仲）井路（左）の堰堤・取水口

写真 14 は、緒方上井路の堰堤（取水口）と三区井路（野仲井路）の堰堤（取水口）の空中写真である。阿蘇火砕流溶結凝灰岩の河床が侵食され、幾筋もの溝が形成されている。緒方上井路は、自然の溝を堰き止め、緒方川左岸の岩盤を掘り割って井路を造っている。掘り割りの上には井路壁があり、石垣を 1 段から 2 段に積みコンクリートで補強している。三区井路の堰堤も溝状になった河床を堰き止め、岩盤を掘り割って井路を形成している。緒方上井路堰堤の標高は 181.15m で、三区井路堰堤の標高は 181.84m で、0.69m の標高差となっている。三区井路の取水口で特徴的な部分は、取水口から下流へ約 230m にわたって凝灰岩の岩盤を掘り割っていることである（三区井路の詳細については、「10 原尻地域の景観」で述べる）。



写真 14 緒方上井路と三区井路（野仲井路）の堰堤・取水口

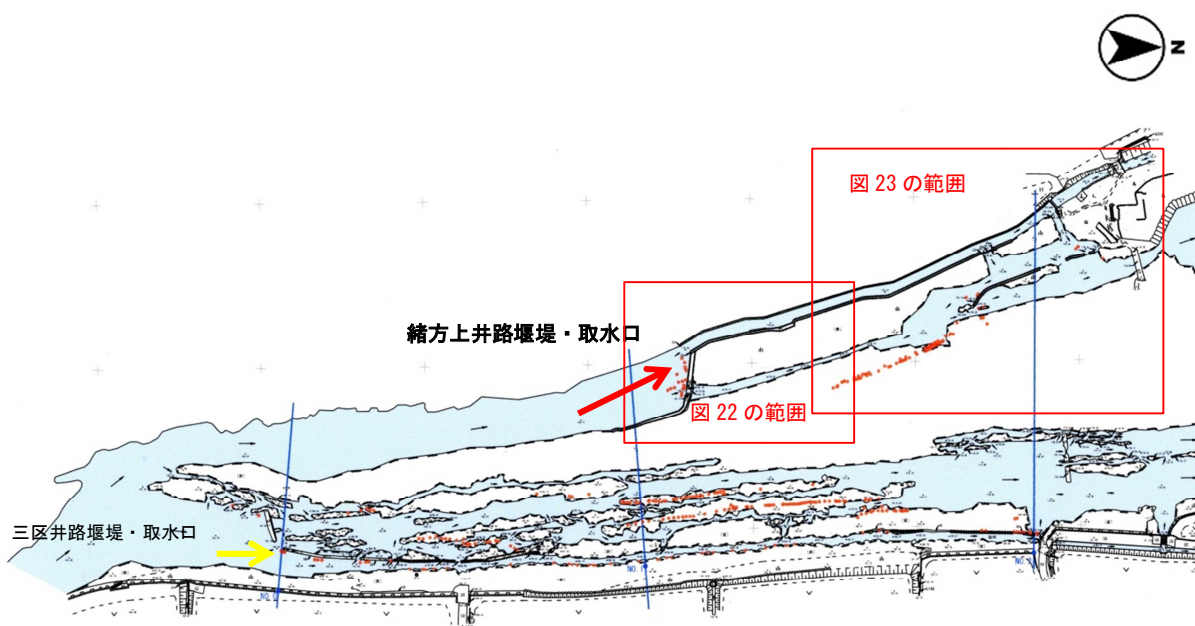


図 21 緒方上井路と三区井路（野仲井路）の堰堤・取水口（測量図）

②井路開鑿工事の痕跡

緒方上井路取水口付近は、緒方盆地を潤す井路網の中でも重要な位置を占める。そのため取水口付近の形状の測量調査を実施し、その際には凝灰岩の河床に穿たれた柱穴の確認も行った。緒方上井路堰堤の上流側では、16個の柱穴（柱穴群1）を確認できた（図22〔図21に範囲表示〕）。これは柱穴に杭を立て、板堰を据え付けて堰堤とした痕跡であろう。コンクリートが普及する以前の遺構で貴重なものである。図23は、緒方井路堰堤から下流、約50m地点から100m地点にわたって確認できた柱穴群2である。柱穴群の下流の山林内には、水車小屋の跡と言われる場所があり石垣遺構が残されている。ここに導水し水車を回すための水路壁用の柱穴であろうか。

辻地域の「地獄水門」がある場所では、川入川と緒方上井路が交差しており、川入川の水を緒方上井路に取り込んでいる。水量を調節するために水門が設置されており、「地獄水門」と呼ばれ

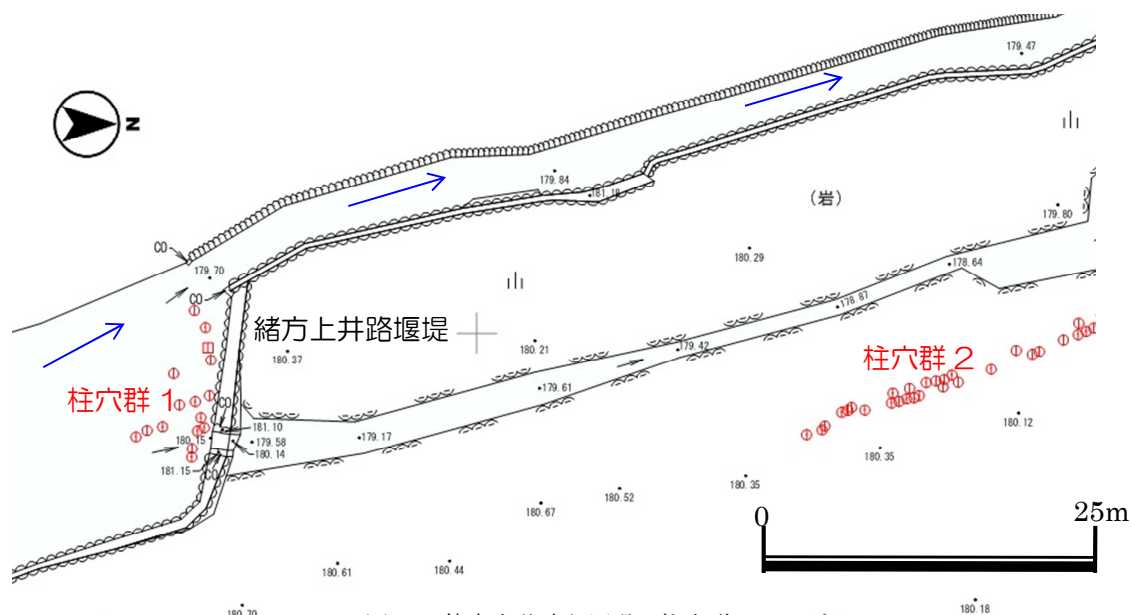


図22 緒方上井路と堰堤の柱穴群（測量図）

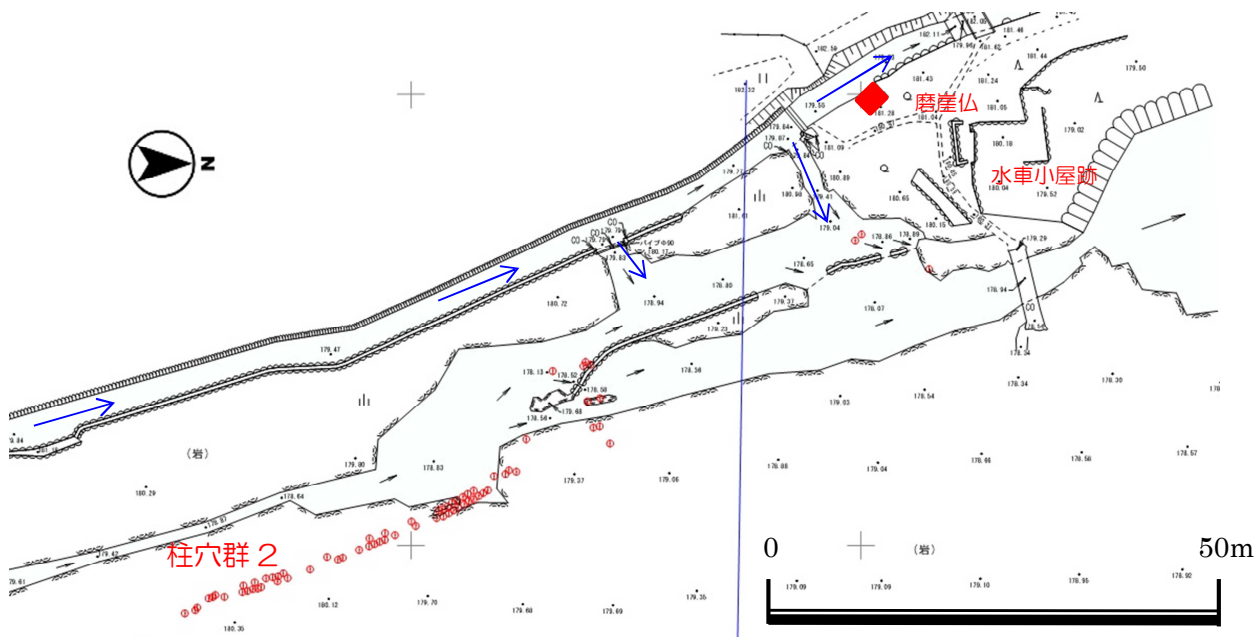


図23 緒方上井路と堰堤の柱穴群（測量図）

る。ここには、弘化2年(1845)銘の「石割碑」(写真15)があり、緒方上井路の改修工事をした記録が刻まれている。内容を要約すると、「緒方上井路の貫(隧道)際よりも下が毎年破損するため、人々は大いに苦しんだ。そこで数千人を動員し150間の両岸築を掘り替えた。水路安全のため願王尊一軀を安置した」ということである(表4 石割碑銘文参照)。「緒方碑文集 漢文編 その一」によると、旧井路は、緒方川沿いを「恰も栈道の如くに水路を作り迂回していた。その部分がいつも大破して困ったから、弘化2年にトンネル東口から水路を変更して、北側の山の下にトンネルを掘り地獄に貫通したのである。」この記述を図示したものが図24である。旧上井路の路線を推定して赤い線で示し、現在の路線を青い線で示した。石碑に書かれている「願王尊一軀」は、おそらく改修工事が完了した上井路取水口付近にある磨崖仏であろう(図24 願王尊1)。願王尊2は、旧県道沿いに安置されており、当初の井路開鑿に関わるものかもしれない。

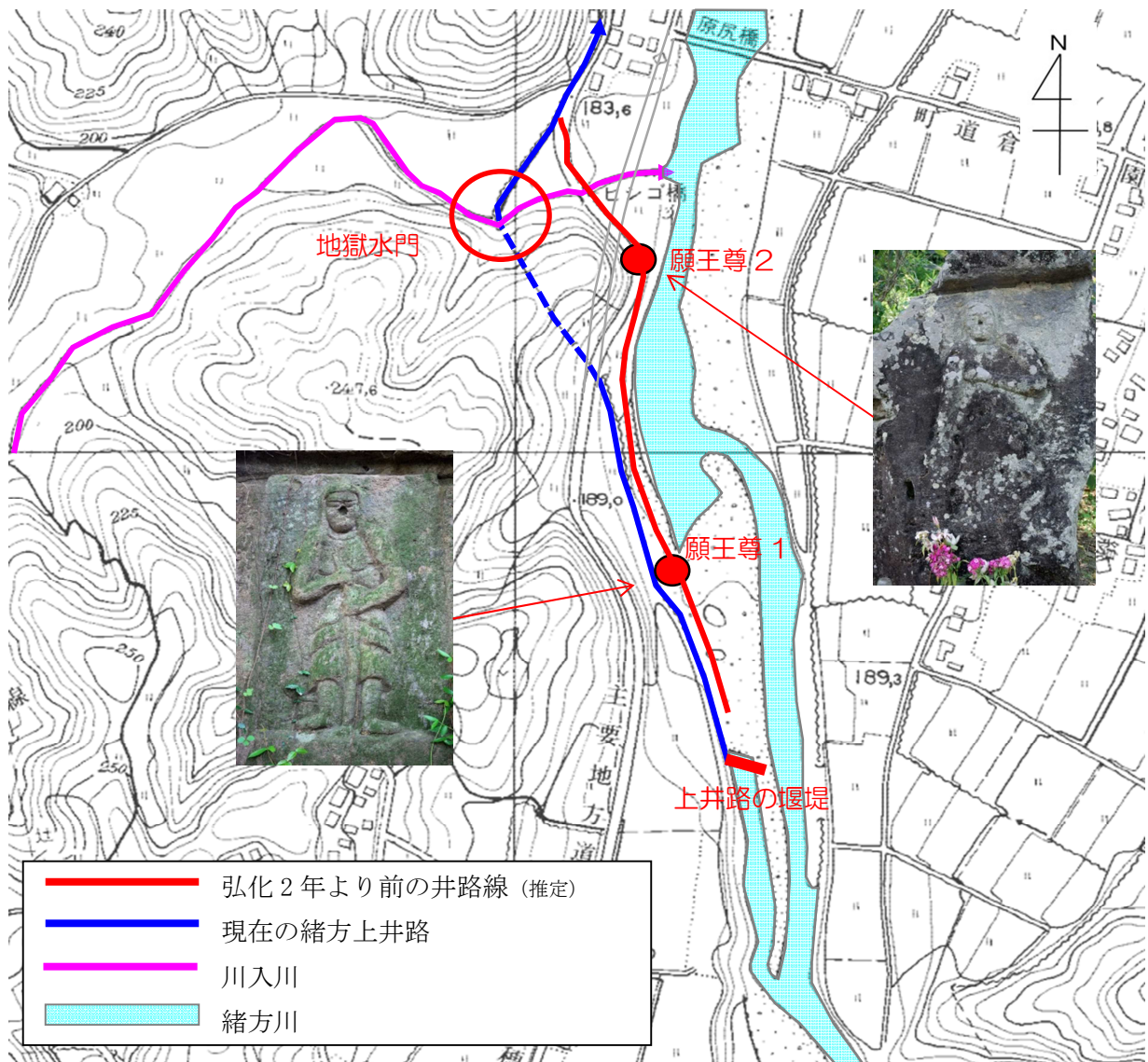


図24 緒方上井路・地獄水門・願王尊位置図

表 4 地獄水門 石割碑銘文

御用掛	吉野謙八郎	村横目	郷兵衛	鍛冶	玉来組
		井手目代	三良右工門		五良兵工
		定肝煎	吉右工門		八百次
		次良兵工	吉郎		竹五郎
		村肝煎	藤右工門		哥五郎
		左五郎	左五郎		安五郎
宰判	大久保傳兵衛	大工	今山組		
	森十郎助	木遣	軸丸組		
	上自在組大庄屋		井上組		
	太田組小庄屋				
	今山組右同				
	井上組右同				
	治郎助				
	太郎助				

惣棟梁	益右工門	飛田組	宗左工門	岩吉	宗五郎	初助	忠右工門
石割	穴井迫組						
	賢左工門						
脇棟梁	喜左工門						
	梅吉						
	大吉						
	植木組						
	六右工門						
	原尻村						
	治郎助						
	井上組						
	幾蔵						
	友蔵						
	年野村						
	為右工門						
	大五郎						
	軸丸組						
	市兵衛						
	吉五郎						

夫緒方之庄井懸上井手の最初者往古從寛文二年始同曆十一亥年自馬場下掘次將亦天和三亥年自井手口貫掘割今于既年月押移經百八十四年の星霜 雖在流通此地土鮮而遠方ヨリ持寄造營之自貫際下毎年及破損大煩萬民也依此今年欲於新掘替百五十間の兩岸築而漸々蒙官邊之趣儀數千員之聚強力速成就■使國家永安康矣 惟時弘化二歳乙巳三月吉日于茲奉安置願王尊一軀点眼之序綴碑銘以塞其需云云 現大福 穎宗誠欽誌

夫れ、緒方庄井懸り上井手の最初は、往古寛文二年より始まり同曆十一亥年、馬場より下掘り次ぎ、はたまた天和三亥年、井手口より貫掘り割り、今既に年月押し移り、百八十四年の星霜を経たり。流れ通りに在りと雖も此の地は土鮮く、遠方より持ち寄せ之を造営す。貫際より下は毎年破損に及び、大いに万民を煩わせしなり。これに依り、今年新たに百五十間の兩岸築を掘り替えんと欲して、ようやく官邊の趣儀を蒙り、數千員の聚、強力、速やかに成就■、國家をして永く安康ならしめたり。惟時弘化二歳乙巳の三月吉且、茲に願王尊一軀を安置し奉り、点眼のついでに聊か碑銘を綴り、以て其の需を塞ぐ、云々。現大福 穎宗誠 欽み誌す。



写真 15 石割碑

- ※ 井懸り＝堰をして灌漑すること
- ※ 寛文二年＝一六六二年
- ※ 貫掘り割り＝岩盤を溝状に掘り割ることか？
- ※ 天和三年＝一六八三年
- ※ 官邊＝役所（藩のこと）
- ※ 弘化二年＝一八四五年
- ※ 点眼＝仏像開眼
- ※ 穎宗誠＝大福寺第十世住職、明治二年示寂
- 不明文字

③辻（倉園）地域のクンバ（汲ん場）と緒方上井路に関わる景観

緒方上井路は、辻の蜘蛛迫に堰堤を設け、辻の倉園地域を經由し、上自在・下自在・馬場方向へ流れてゆく。上井路沿いには数軒の民家が建ち並び、井路にはクンバ（汲ん場＝汲み場）が設けられている（写真 16、17）。緒方上井路が、水田の灌漑だけでなく人々の生活に密着していたことを物語る要素である。汲ん場を重要な構成要素に選定するかどうかは、保存状況・所有者の同意などを勘案することが必要である。緒方盆地全域では、154ヶ所に及ぶため報告書では、位置図と一部の写真掲載に留めておく。



写真 16 緒方上井路の汲ん場（辻 倉園地域）と石樋石碑



写真 17 汲ん場（左 No. 4 右 No. 5）

④石樋石碑と石用川

石樋石碑は、緒方上井路が石用川を渡河するために建造した石樋の記念碑である。銘文は次のとおり。「抑本井路ノ開鑿ハ寛文二年ニシテ今ヲ去ルコト二百二十五年前ナリ 爾来當處延長三十一間ノ水ノ通ヒ悪シク隔年毎ニ三方練土ヲ以テ之ヲ修繕スト雖モ頗ル工事ノ困難ヲ感ジ且ツ巨額の費用ヲ要スルニ依リ茲ニ明治二十一年春關係村落ノ一致戮力ヲ以テ石樋ニ改築ス 銘シテ永年ニ傳フト爾云 明治二十一年五月建設」。



写真 18 石樋石碑

現在、緒方上井路の内部壁面はコンクリート造りで、放水門もコンクリート製である。石樋が現存するかどうかわかる水路下に行き確認したところ、見事な石組構造の架樋があった。この場所から緒方上井路を下流方向に下ると、黒土甲川を渡河する場所（緒方町上自在の黒土甲川）がある。ここにもよく似た石組構造がある。石樋石碑には明治21年の工事であることが刻まれているので、類似構造の黒土甲川架樋も同年代の可能性が高い。石樋石碑の下を流れる石用川の水は、緒方下井路に全て合流している。黒土甲川架樋の下を流れる黒土甲川の水も緒方下井路に全て合流している。緒方盆地に注ぐ小河川の水流を取り込む緒方上井路・下井路の構造は見事である。

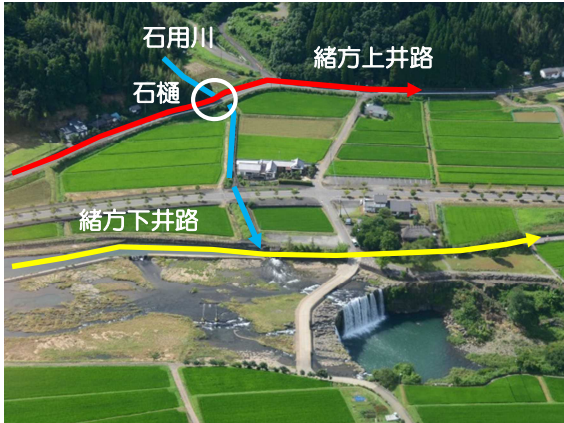


写真19 石樋の位置



写真20 石用川を越す石樋

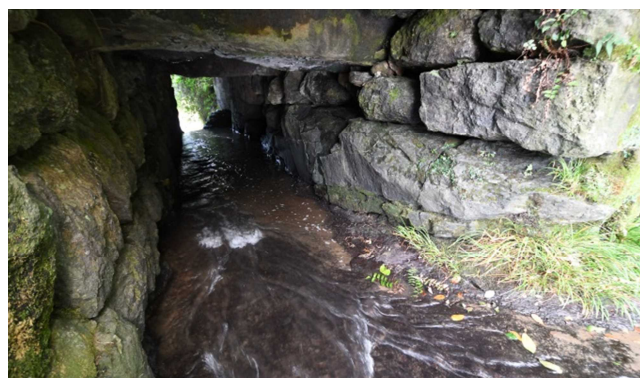


写真21 石用川の石樋（左、辻）と黒土甲川架樋（右、上自在）

⑤辻地域の景観2（緒方上井路に関わる景観）を形作る構成要素

辻地域の景観2で代表的なものは、緒方上井路取水口、地獄水門、上井路改修工事に関わる記念碑（石割碑）、石樋石碑などである。江戸時代から明治を経て現代まで稼働している石樋・水門があり、緒方上井路の構造がよくわかる場所である。石碑に工事の由来を記録し、後世に伝えようとする意識が素晴らしい。

辻集落・原尻集落境には、小富土地域を抜け岡城へ通じる道があった。現在は廃道になっているが、緒方上井路を渡河するためにアーチ式石橋が架けられた。上面はコンクリート舗装されているが、井路の汲ん場に降りると石橋のアーチを見ることができる。緒方上井路沿いに沿って流れを下る時、最初に見るアーチ式石橋と組み場で、緒方上井路の景観を特徴付ける要素のひとつである（表5 構成要素一覧番号9 三代家の石橋）。

表5 辻地域の景観2を構成する要素

番号	要素名	写真	説明
1	緒方上井路の堰堤		石造の堰堤をモルタルで補強している。緒方盆地の左岸のうち約46%を潤す井路の取水口である。
2	緒方上井路堰堤より下流の石造井路護岸		石造の護岸で、モルタルで補強している。
3	緒方上井路排水門と排水口		緒方上井路最上流部にあるコンクリート製水門（鉄製昇降機・鉄製堰板付）である。増水時・水不要時に閉鎖して、水を緒方川に逃がす役割を持つ。
4	緒方上井路磨崖仏1		緒方上井路の取水口から下流約120mの位置に巨石があり、それに彫刻された磨崖仏。 地獄水門そばにある石割碑に「奉安置願王尊一軀」と記述があり、この磨崖仏が相当すると思われる。
5	緒方上井路磨崖仏2		この磨崖仏に関する記録はないが、緒方上井路の当初の開鑿時に安置されたものかもしれない。

番号	要素名	写真	説明
6	緒方上井路の地獄水門		コンクリート製水門（鉄製昇降機・鉄製堰板付）で、川入川の水を堰き止めて、緒方上井路に流し込む役目を持つ。また、増水時には開放して緒方川に放水する役目もある。
7	緒方上井路の旧地獄水門		現在の水門が完成する以前の石製水門である。木製の堰板をはめ込む溝がある。
8	地獄水門の石割碑		弘化2年(1845)に造られた記念碑で、緒方上井路の改修工事・隧道工事の概要が記されている。御用掛・宰判・木遣などの文字があり、井路改修工事には岡藩が深く関わったことがわかる。緒方井路の開発を知る上で貴重な石碑である。
9	三代家の石橋		この石橋は、岡城下へ通じる旧道の一部だった。井路を渡るために建設された。現在は民家に渡る橋として利用されている。
10	三代家の石橋		No.9の三代家から、下流にある三代家のアーチ式石橋。

番号	要素名	写真	説明
11	石樋石碑		石碑銘によると、緒方上井路の下を石用川が流れており、架樋の修繕を隔年で三方練土により行っていた。その工事が頗る困難であったので、明治21年に関係村落が力を合わせて石樋に造り替えた。このことを記念し、明治21年に記念碑を建立した。
12	石樋の排水門と石垣（暗渠）		石樋石碑に記された石樋の石積み構造である。石積み部分は、延長約10.6m・高さ8.0m、奥行6.0mである。隧道の開口部は幅1.8m、高さ1.8m、奥行6.0mである。石碑に書かれた明治21年の建造物であろう。下流にある黒土甲川の石樋は、ここと構造がよく似ており、同時代に建造された可能性がある。

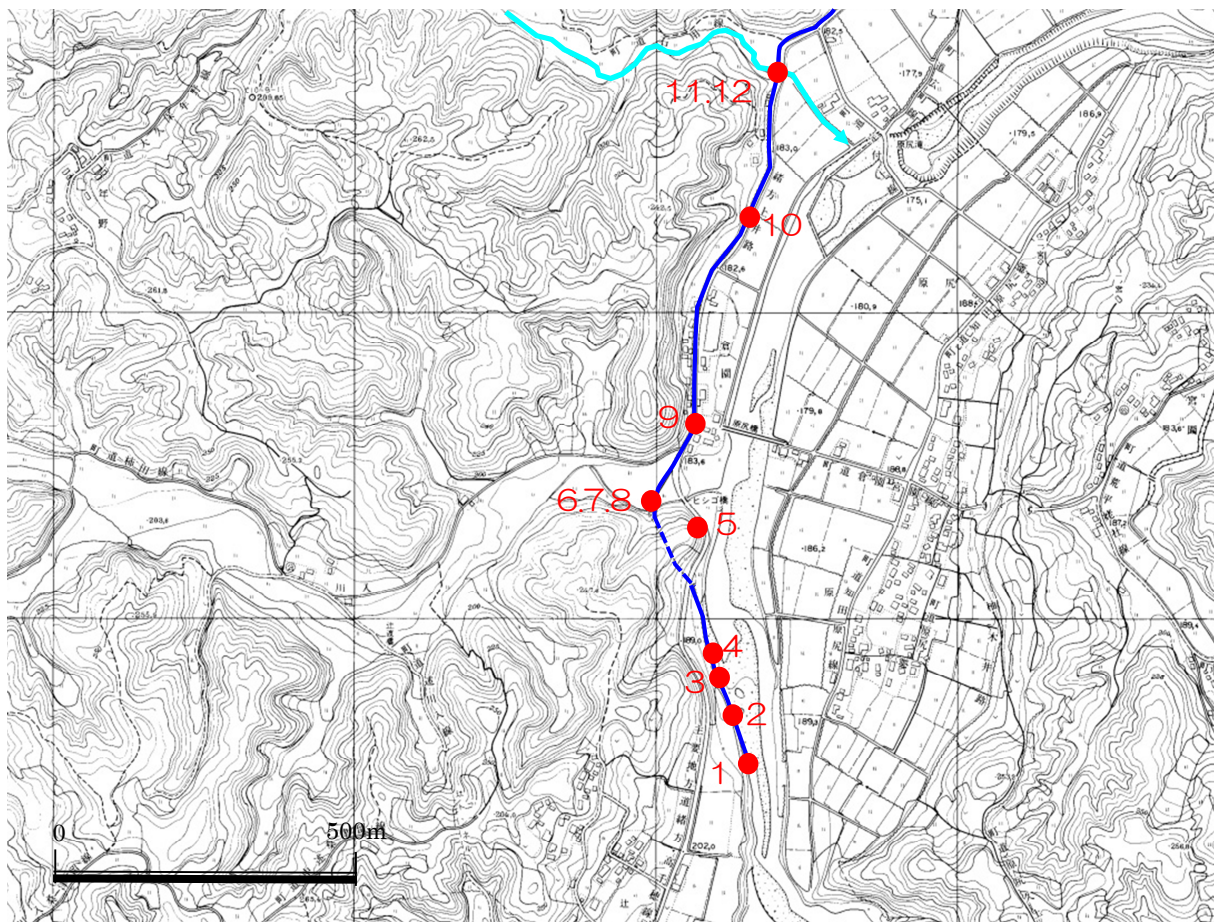


図25 辻地域の景観2の構成要素の位置図